

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 33 回  
第 7 章 天沢退二郎先生  
その 1 『犬のバルボッシュ』(下)

1982 (昭和 57) 年 2 月 13 日の夕刻、パリ 10 区ボン・ヌーベルの韓国料理「竹園」で私たちが食事をはじめたころ、日本人の男性ふたりが店に入ってきて、となりのテーブルに案内された。ひとりは、天沢退二郎先生 (1936~2023 年) だった。

**韓国料理「竹園」**

若狭蔵之助先生とわかれて、母と私と、通訳をお願いしていた I さんの 3 人は、パリにむかった。引きつづき I さんの案内と通訳で、パリで 1 週間ほどすごして帰国した。I さんは、ふだんはパリで暮らしていた人だ。

私がイタリアを旅行していた 1 週間のあいだのことは、よくわからないのだけれど、パリに出たころ、母は、食べなれないフランスの食事にちょっと疲れていた。心配した I さんが、一人暮らしの自分のアパートに私たちをまねいて、日本食の夕食をふるまってくださったりした。そして、2 月 13 日の夕食は、泊まっていたホテルに近い韓国料理屋に行くことになった。「竹園」という、その店は、韓国料理といっても、庶民的な焼肉屋だった。

私たち 3 人がコンロで肉を焼きながら、食べはじめたころ、日本人の男性ふたりが店に入ってきて、となりのテーブルに案内された。私の左どなりに座った人がさっそくコンロに火をつけようとしたけれど、うまくつけられない。私が手をのばして、つけてあげた。テーブルとテーブルのあいだは、人がひとり、ようやく通れるくらいだった。

私は、間もなく、火がうまくつけられなかった、その人が、写真で見たことのある天沢退二郎先生であることに気がついた。テーブルの向かい側に座った、もうひとりの男性が「天沢、」と呼びかけたのだ。

**『校本宮澤賢治全集』と『宮澤賢治の彼方へ』**

私の卒業論文のテーマが宮澤賢治だったことは、第 6 章「鳥越信先生」で書いた。賢治をあつかうことは、もう学部 3 年生のときに決めて、まず、当時、完結間近の筑摩書房版『校本宮澤賢治全集』(筑摩書房 1973~77 年) を手に入れた。大学の「事業部」(立教独自の大学生協のようなもの) の書店で 1 割引きで買って、何回かにわけて、家にはこんだ。

宮澤賢治の全集は、賢治の没後間もなく刊行された文圃堂書店版『宮澤賢治全集』全 3 巻 (1934~35 年) からはじまって、何種類も出ているのだが、この『校本全集』は、存在するすべての賢治の原稿に立ち戻って本文を確定し直し、推敲の状態などもつぶさにわかる画期的なものだった。編集の中心は、入沢康夫さん (1931~2018 年) と天沢退二郎先生である。雑誌『ユリイカ』臨時増刊 (1970 年 7 月) の総特集「宮澤賢治」に掲載された、入沢さんと天沢先生の「徹底討議『銀河鉄道の夜』とは何か」が『校本全集』刊行につながった。当時最新の筑摩書房のいわゆる昭和 42 年版『宮澤賢治全集』全 12 巻・別巻 1 や、それ以前の全集などの刊本を資料に行われた十数時間の討議のおわりに語られたのは、つぎのことばだ。

入沢 （前略）やはり、原稿そのものの一枚一枚の写しがあれば、おそらく今日の討議は十倍も実りのあるものになったと思う。

天沢 また、この討議のかかなりの部分が意味のないものになる。しかし、原稿が無かったがゆえに、いろいろ考えなければならなかった。その考えるということ自体が、まったく無駄というわけではなかっただろうということは感じますね。

『校本全集』の配本がはじまったころに発表された天沢先生のエッセイ「草稿の森の中から」（『ちくま』1973年6月、天沢『《宮澤賢治》論』筑摩書房1976年所収）によれば、天沢先生は、上記の『ユリイカ』臨時増刊が刊行された1970年の年末になって、「銀河鉄道の夜」の草稿を確認するために、ひとりで宮沢清六さんをたずねる。清六さんは、賢治の8歳年下の弟で、兄の残した原稿を大切に守り、著作権の管理をしてきた人だ。花巻に1泊した、帰りがけ、あらためて天沢先生を呼び出した清六さんは、「これはまだ自分ひとりの心づもりであるが、あなたと入沢康夫さんに、中心になって、全集をやり直してほしいが、どうか、」と切り出したという。やがて、天沢先生や入沢さんは、賢治の草稿という森のなかへと分け入っていくことになる。

さて、大学3年生の私は、賢治の研究書や評論も読んでみようと思って、最初に境忠一の『評伝宮澤賢治』（桜楓社）に取り組んだ。1963年の刊行だが、手もとにあるのは1970年の版だ。470ページあまりの大著で、賢治のまとまった伝記である。これは熟読した。4年生になって、前田愛先生から論文の書きかたについての指導があったが、それより前に、注の付けかたとか、参考文献の示しかたなど基本的なことも、この本から学んだ。前にあげたことのある文献については、発行所や刊行年を繰り返して書き出さずに、「前掲書」と簡略に記せばよいことなどを、ずいぶん感心して勉強した。

つぎに読んだのが天沢退二郎『宮澤賢治の彼方へ』（思潮社）である。1968年初版だが、私が読んだのは、引用などを『校本全集』に拠った増補改訂版で、1977年刊行のもの。「序論」には、こう書かれている。

ぼくはぼくの詩的問題のいくつかをして、宮澤賢治の作品を通過させてみようと思う。いや、そうでなく、賢治の作品を通過することによってはじめて形をとる詩的問題を提示してみたいと思う。そして、そのことによって宮澤賢治の彼方へ近づこうと願うのだ。（傍点原文）

私は、「序論」のこのことばや、このことばを実践した『宮澤賢治の彼方へ』全編から、文学的なテクストを読み、感じ、考えること、つまり、文学的なテクストを「生きる」とは、こういうことかと思い知ったのだ。これは、いま現在のことばで語っているだけかもしれないのだけれど。

## 韓国料理「竹園」（続）

さてさて、1982（昭和57）年2月13日の夕刻、パリ、ボン・ヌーベルの焼肉屋さんに話を戻さなければならない。

私の左どなりは天沢退二郎先生だとして、向かい側の人はいだれか。著名な映画評論家の山田宏一さん（1938年～）だった。刊行したばかりの映画の理論的な本を

いっしょに訳したフランス文学者で映画評論家のHさんのことを話しはじめたから、ああ、この人は、もうひとりの訳者の山田さんだとわかったのだ。Hさんは、天沢先生が大学院時代にいっしょに勉強した人で、おふたりの共通の友人ということのようだった。在外研究でパリにいる明治学院大学教授の天沢先生を旅行中の山田さんがたずねてきたということも、だんだんわかってきた。これは、あとで知ったのだが、天沢先生と山田さんは、1964（昭和39）年、フランス政府給費留学生として同じ船にのって留学した仲間だったという。

おふたりの食事も進み出して、山田さんが「天沢は、パリで何を勉強しているの？」とたずねた。「国会図書館にかよって、アーサー王関係のものを読んでいるよ」——フランス文学者としての天沢先生の専門は、中世のアーサー王物語だ。でも、夜には楽しみの読書をしている、ゆうべ、アンリ・ボスコを読み終わったという。山田さんがボスコについてたずねると、南フランスの作家で子どものものを書いている、日本では『ズボンをはいたロバ』（多田智満子訳、晶文社1977年）（注1）と『少年と川』（江口清訳、あかね文庫1960年）が訳されているとあって、つづけて、読み終わったばかりの物語のあらすじを語りはじめた。

……マルチヌ伯母さんは、夏休みがまだ2週間のこっている「ぼく」を誘い出して、ふたりで旅に出る。伯母さんは、子どもころに暮らした、ふるさとの丘々と《テオティーム屋敷》をめざしているのだけれど、そこまでは二十里もある。伯母さんの手荷物、ハサミと、繕い用の糸、『夢の鍵』の本、それに、パンとチーズ……。でも、犬のバルボッシュは、つれていけない。まず、四又のところで乗合馬車にのる。ところが、バルボッシュが追いかけてきた……。

聞いている山田さんが「そこは、映画なら、こういう場面だね……」とことばをはさみ、天沢先生の語りがさらに豊かに引き出されていく。となりのテーブルの私たちも、夢とうつつが滲み合うような旅の物語にたちまち聞き入った。天沢先生と山田さんは、話しながら聞きながら、ワインを1本空けて、2本めにとりかかる。先生は、私たちをふくめた4人の聞き手のために、声を大きくする。1時間ほどしても話が終わらなかったから、母がいつもは頼まないデザートをオーダーして、聞きつづけた。

それでも、やがて、話が出口にたどり着き、私たちは、お勘定をして店を出ることにした。テーブルをはなれるとき、母が小声で私に「ごあいさつしなくていいの？」とたずねてくる。母もIさんも、その人が天沢退二郎だとわかっていたようだ。「ごあいさつ」のしようもないし、まるで母親のようなことをいうんだなと少し笑いながら、私は、「いや、いつか、ごあいさつできると思うから……」とさきやき返した。そして、3人でただ深くおじぎをして、外へ出たのだ。

### 福音館土曜日文庫

日本児童文学者協会の機関誌『日本児童文学』が300号をむかえたのを記念して論文が募集されたことがあった。母とフランスに行ったのは、私の大学院3年次が終わるころだが、2年次の夏休みに400字原稿用紙70枚ほどの「宮沢賢治「風の又三郎」紀行—“二重の風景”への旅—」を書いて、300号記念論文に応募した。東京の町のなかを移動しながら、「風の又三郎」について考えていくという文章で、私なりに「宮沢賢治の彼方」へと近づこうとする試みだった。佳作の一つに選ばれて、『日本児童文学』の1981（昭和56）年6月号に掲載された。手紙をつけて掲載

誌を天沢先生のご自宅にもお送りしたのだが、在外研究中の留守宅に届いたのだと思う。

フランス旅行の翌々年、1984（昭和 59）年の 11 月に、アンリ・ボスコ作、天沢退二郎訳の『犬のバルボッシュ』が福音館書店の土曜日文庫の 1 冊として刊行された。私は、仙台で 2 年めの教員生活を送っていたのだが、手に入れて読んだ。最初の章は「旅のしたく」。「ほんとうのところ、そんなにむづかしいことではなかった……／マルチヌ伯母さんは、ぼくの両親から、上手に何でも引き出してしまう。そんなわけで、ぼくを連れていく許しも引き出したのだ。」と書き出される。2 年 9 か月前にパリで聞いた、あの物語だった。通読して、もちろん、とてもおもしろかったのだが、読みながら、あのときの天沢先生の語りが思い出されて、あのときのほうが、もっとおもしろかったなとも思ったのだ。

この『犬のバルボッシュ』をふくむ『パスカレ少年の物語』（全 5 編 3 冊）が刊行された。マルチヌ伯母さんといっしょに旅をした「ぼく」の名前がパスカレだ。『少年と川・島の狐』が 1985（昭和 60）年に、『バルガボ パスカレ』が 86 年に出ている。この時期、これらの天沢先生の翻訳の仕事を承けて、ボスコを論じたのは、脇明子さんだ。脇さんの著書『ファンタジーの秘密』（沖積舎 1991 年）のいくつかの章でとりあげられているが、つぎは、第 5 章「象徴を見る目」の一節。

ボスコの『少年と川』で、主人公のパスカレが、行くのを禁じられていた川をはじめて見にいき、川中島の見えるところで少したた寝をしてから目をさますと、「不意に、島のまん中あたりで、樹木のしげったところからひとすく青い（ママ）すきとおった煙があが」ったというだけの光景が、なぜ激しい緊張で背筋をぞくぞくさせるのだろう。そしてそのあと、帰りが遅くなったパスカレがマルチヌ伯母さんに叱られていると、突然密漁者のバルガボが魚を持って現れ、伯母さんたちがそれを焼かせて、「思いがけない慎重な手つきで魚を切りひらき、骨をとりのぞくと、魚肉の上にオイルを二滴、それから酢をさっとふりかけ」て、パスカレに食べさせてくれるのだが、この小さな出来事がなぜおそろしく重要なことに思えるのだろう。

脇は、この二つの挿話の魅力や重要性が「筋の上では説明がつかず、簡単には理解できない」ともいう。ボスコのテキストには、このような説明のできない場所があちこちにあるように思う。そして、ボスコのテキストに説明できない場所を見出したことに脇明子の批評の意味があったとも思うのだ。

### 福音館文庫

時間は、急に 2013（平成 25）年にとぶ。この年、天沢退二郎訳の『パスカレ少年の物語』全 3 冊のうち、『犬のバルボッシュ』だけが福音館文庫として再刊された。土曜日文庫版とくらべると、判型がひとまわり小さい。手もとの福音館文庫には、「謹呈 著者」の短冊がはさまっている。巻末の「訳者おぼえがき」は加筆修正されていて、つぎの一節がある。

一九八一年の四月から、在外研究でフランスに滞在していた私は、翌八二年、パリ国会図書館に通って毎日『バルボッシュ』読みに没頭し（途中でやめられな

くなった！)、日録によれば二月十二日に読了、翌十三日に友人の山田宏一と焼肉屋で夕食をともにしながら、『バルボッシュ』を大いに語った。(この時偶然、右傍の席に居られたのが宮川健郎氏(当時面識なし)で、すべてを聞き取られ後に私との対談でこの話をされたのが、国立国会図書館月報 No.624 に掲載されている)そして私はその年の四月に帰国してから、今度は時間をかけて邦訳に没頭、あらためてこの物語のおもしろさを存分に味わうことができた。(カッコ内原文)(注2)

(つづく)

(注)

- 1、多田智満子訳は、それより前に『ズボンのロバスケ』のタイトルで刊行されている(学習研究社1970年)。
- 2、文中の『国立国会図書館月報』No.624は、2013(平成25)年3月発行。宮川健郎「天沢退二郎さんに聞く—21世紀の宮沢賢治—」が掲載されている。これは、私が監修した企画展「日本の子どもの文学——国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」に設けた、半年でかわる「児童文学者コーナー」で宮沢賢治をとりあげた期間(2012年8月～13年2月)の12年10月6日に天沢先生をおまねきして行った講演と私との対談の会の記録である。そのとき、あらためてパリの焼肉屋さんの話をして、ボスコと宮沢賢治の共通点についてもうかがった。